
HEROS

風車

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

HEROS

【Nコード】

N9712A

【作者名】

風車

【あらすじ】

時雨公園に現れるという謎のヒーロー。彼と1人のおっさんが出会ったとき、物語がスタートする。

1 part 0：時雨公園マンの全貌（またの名をプロローグ）

深夜3時。丑の時。

『雨水』という有名な武士が自害した場所に作られた公園。

静けさの中に悲しみを残すこの歴史的場所に電灯で照らされてできた二つの黒い筋。

横たわったまま動かない男の影とを荒くしている少年の影。

少年の手は男の黒黒しい赤の返り血が数滴。気にせず真っ白い服にそれをごしごし拭く。

「今日の見回り終了。」

収獲は一人。警察に突き出せば、はい、終わり。

HEROS

埼玉県。地方都市。朝の7時。

朝の淡い日差しが艶やかに反射する軽い朝靄の中で、少年少女達は自慢の格好良いユニホームを片手に小走りに同じ方向に向かっていく。

行く先にあるは、『神吉野大学付属高等学校』。

部活がたいへんに活発な有名大学の付属高校である。

そんな学校の近くにはある公園がある。

昔。江戸時代。この辺で少し名の響いた『雨水』という武士が『お時』という今でいう恋人と自害した悲恋の物語。

公園になった今でも、その話は地元の人に語り継がれ、人はこの公園を『時雨公園』と名づけた。

悲しい伝説が残る公園が近くに居座る学校『神吉野大学付属高等学校』の1年A組では、この公園のもう一つの伝説で盛り上がっていた。

登校完了時間、朝8時。1年A組。

がやがやと教室中が囁き合い、ざわめく。

ガラッとドアが開く。先生が来た。だが、おさまらない、この興奮感。

優等生さえ後ろの席の友達と喋ってしまう。そんな話題はいつも決まっている。

先生も慣れたようにちよつとだけ話に耳を傾けている。

「また、近くの公園で変質者が捕まったらしいよ。」

「聞いた聞いた。『時雨公園マン』でしょ？」

「本当に皆のヒーローだぜ。」

口々に生徒がささやく。そう、今現在話題になっているのは、『時雨公園』に出没する謎のヒーロー、『時雨公園マン』という、なんのひねりも無いネーミングの人物の話についてだ。

それは、約、半年くらい前か。

皆も知っている通り、他の県もそうなのだが埼玉県の地方都市にも変質者が続出した時期があった。

世が変わり、時代が変わり、人が変わり……

皆が変わるその時間軸のなかで生まれてしまった軸の歪。

その軸の歪は、人を歪ませ、世を歪ませた。その結果がこれなのだろう。

そんな時期の真っ只中、そんな変質者をバツタバツタと退治する人物が忽然と現れた。

年齢・性別不詳。仮面をつけて颯爽と現れ、そして颯爽と消えていくまるで年代もののアニメから飛び出してきたような謎のヒーロー。それが、皆の人気者になっている『時雨公園マン』だ。

おかげでこの付近の変質者は年々減りつづけている。

だからなのか。この頃は、深夜に変質者を倒すより、人知れずごみ拾いをして帰っていく人の影を目撃する人のほうが急増している。ヒーローも暇なのだろう。

久しぶりの大活躍ニュースは、興奮を呼ぶのだ。

一部の人を除いて。

「ふわあああ・・・」

その一部となる1人の人物は、目の下にどデカイ隈を作っていた。すぐく眠そうに頭をうつらうつらと傾けている。

だが、生真面目な性格が災いしているのか何なのか。よくわからないが、必死に目を開ける努力をしているその少年『徳川 緋色』は、30分以上の格闘の後、遂に・・・

「・・・zzzz」

睡魔に圧倒され、負けた。

遡るは江戸時代。

徳川幕府が栄えた世は、歴史上の記録によれば、400年以上続いたという。

異例なほどそんなに幕府を持続させてきた「徳川家」の一門は、開花の世、革命の世、戦乱の世、回復の世を乗り越え、今もまだしぶとく生きているといわれている。

否、いわれているというか、間違いなく生きている。

なんせ、睡魔に負けたこの黒髪・黒目、銀縁丸眼鏡をつけている何の特徴の欠片も見当たらない無い只の少年こそがその証拠。

……そう、この『緋色』こそが徳川家の子孫なのだ。

徳川の子だって人の子供。特徴が無いのは当然だし、普通の人間らしく振舞えばそんな気配は微塵にも感じられない。

だから、緋色は普通に暮らしている。

『外側の緋色』は。

「ただいま。」

皆が目を疑うほどの大きな庭と佇まい。

夏の日差しを浴び、庭の広い緑の草原は気持ちよさそうに風に靡い

ている。

中腹の地にある小池は、鯉が数匹。

竹と石がぶつかる「カコン」という音しか響かない、この空間。気持ちの良い、荘厳な静寂。

と、そこにそれを打ち破るように何者かの気配を緋色は感じ取った。息を潜めるような足音とヒュッという風を斬る音。

緋色は、目をつぶり、サッと音のほうに手を掲げると両手をすばやくパンツと合わせた。

パシッ

緋色の手に冷たい感触が肌を伝わって体全体に染み渡った。

目を開ける。黒髪の背の高い見目の良い男が立っていた。緋色の父だ。

「…鈍ってはいないな。」

そういうと、緋色の父はその場に座り込んだ。緋色も座り込む。

また、空間に静寂が戻った。

「ヒーローとしての勤めはきちんとやっているか。」

父がまた静寂を破った。緋色はそのことを別に気にするでもなく「うん。」と素っ気無く答えた。

由緒正しき徳川家。そのせいあってか、何かと面倒な風習があったりする。

その一つとしてあげられるのは「町内保全」だ。

何故かは緋色も父も知らない。ただただ、風習で昔から徳川家の宗主はそうするようにと口伝として伝わっているだけなのだ。だから、絶対守らなければいけないというものは無い。守っても守らなくても、結局は自分が次の宗主になるのだから。

だが、緋色は真面目に「町内保全」としてあることをやっている。生真面目な性格からなのか。そこはよくわからない部分なのだが。まあ、ここまで読んでくれれば分かってもらえただろう。

ハッキリ言えば、緋色は「時雨公園マン」として保全を行っている。公園の保全のためなら寝る間も惜しむ、その成果あってか、緋色は

すぐ有名になった。

中学一年生とか、小さい頃は、それは嬉しかった。父も母も弟も褒めてくれたし、周りの大人に認めてもらえるのが何より嬉しかった。だが、緋色はこの頃、このことについて疑問を持つようになった。風習だからと無理矢理やらされていたせいもあるのだろう。単純な疑問だった。

――…俺は・・・何で人助けなんてやってるんだろ。

何か他に、やりたいことがある気がする。

本当にこのまま生活していいのだろうか。

そんな疑問が緋色の頭に渦巻くようになった頃、
運命の出会いをすることになる。

1 part 0：時雨公園マンの全貌（またの名をプロローグ）（後書き）

初投稿作品が…長いつつ!!

この調子で、僕の作品にに付き合ってくれる優しい方・・・待っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9712a/>

HEROS

2010年10月17日05時02分発行